㉓ 貝原益軒『女大学宝箱』1716年 桜井市兵衛家文書 福井県文書館蔵

㉔ 九日庵素英『万宝古状揃大全』1845年 福井県立歴史博物館蔵

[おもな展示資料]

（　）は請求番号

- 中山樵者『越前往来』1810年 福井大学附属図書館蔵（A0069-00390）
- 『福井町尽』往来物倶楽部（小泉吉永）蔵（X0146-00001）
- 滝谷祥雲『越前往来』1862年 福井市立郷土歴史博物館蔵（A0146-00048）
- 『ホルストブック』1872年 国立国会図書館蔵
- 『ホルストブック』1872年 国立公文書館蔵（X0551-00661）
- 『NEW GUIDE TO MODERN CONVERSATION IN ENGLISH』1873年 福井市立図書館蔵（A0168-00002）
- 瓜生寅（於菟子）『啓蒙知恵の環』1872年 福井市立図書館蔵（A0168-00001）
- 本多鼎介『越前国地誌略』1876年 福井県立歴史博物館蔵（A0153-00303）
- 艸田子三径『男重宝記』全5巻（4巻欠）1702年 桜井市兵衛家文書 福井県文書館蔵（N0055-00867～00870）
- 『庭訓往来』吉川充雄家文書 福井県文書館蔵（C0037-00615）
- 又玄斎南可『商売往来絵字引』勝見宗左衛門家文書 福井県文書館蔵（B0037-00709）
- 木村孫右衛門家文書（越前市）
- 桜井市兵衛家文書（若狭町） 福井県文書館蔵

このほか、当館寄贈・寄託資料に含まれる往来物・節用集類を多数複製本で閲覧できます。
親子で楽しめるワークシートもあります。

[交通案内]

- フレンドリーバス（無料）

運　行　日：毎週月曜日、年末年始（12.28～1.4）を除く毎日
の　り　ば：市内バス5番のりば
経　　路：福井駅前～福井駅東口～高志高校～羽水高校～生活学習館～市美術館～県立図書館（県文書館）
運行時間：平日8:30～19:00　土日祝 8:30～18:00
運行間隔：30分間隔
（5番のりば、県立図書館ともに毎時00分、30分発）

※7/23・30、8月の月曜日は休まず運行します。

福井県文書館企画展示

ふくいで学ぶ

―地域の手習いと教科書―

『越前往来』福井市立郷土歴史博物館蔵

『ホルストブック』国立国会図書館蔵

平成19年7月27日（金）～9月26日（水）

■8月 4日（土）13:30～14:30　館員による解説
■8月12日（日）13:30～15:30　県史講座「往来物のなかのふくい・日本海域」 講師:八鍬友広 氏（新潟大学准教授）

開館時間：午前9時～午後5時　休館：月曜日・8月23日(木)　入館無料

庶民の手習いと
地域で編まれた教科書

福井県下で多くの人びとが文字を学び、使うようになるのはいつごろからでしょうか。

16世紀半ば、敦賀郡江良浦で旅の僧を村に逗留させ「いろは」を教えさせた事例は、村部での手習い（文字学習）を示すものとしてもっとも早いもののひとつです（『福井県史』資料編8）。また江戸時代に入ると、小浜城下の1640年（寛永17）の職業調査では専業的な寺子屋*1の師匠と考えられる「手習子取（てならいことり）」2人がおり、83年（天和3）には5人に増えていました（『拾椎雑話（しゅうすいざつわ）』）。

こうした早期の事例が知られているものの、一般の農民や町人が広く文字を学びはじめるのは、やはり江戸時代の中頃からとみていいでしょう。明治維新の頃までに県内各地に生まれた寺子屋の数は500をこえたとされています。当館に収蔵されている古文書資料のうち9割が18世紀以降に書かれたものであることもこのことに関連しています。

ただその広がりの大きさに比べて、そこでの学習内容や子どもたちの階層などが具体的にわかる寺子屋の資料は、残念ながら数えるほどしか見つかっていません。このことは、江戸時代までの庶民の手習いが、制度的な強制力をともなわず、商品生産やその流通の進展のなかで生活上の必要からもっぱら自主的に行われていた点、また県内では専業的な師匠が少なかった点などが原因として考えられます。

今回の展示では、江戸時代の初級の教科書である「往来物（おうらいもの）」*2のなかで、県内で編集・出版されたもの、あるいは使われていたものを取り上げました。江戸時代の出版は圧倒的に江戸・大坂・京都など都市部を中心としたものでしたが、少数ながら県内で出版された往来物や独自に編集された手書きの往来物が著され、その流れは明治期半ばまで引き継がれます。

あわせて数少ない県下の寺子屋資料のうち木村孫右衛門家（越前市）の資料、桜井市兵衛家（若狭町、当館蔵）の手習いの手本類を展示しています。

*1 読み・書きなどの実用的な知識を教えるために任意に開いた庶民の教育機関。

*2「往来物」は、手紙のやりとりを意味する「往来」に由来する初級の教科書の総称です。江戸時代には手紙などの例文のみならず、地理や歴史、道徳などの要素を盛り込んだ多彩な往来物が出版されました。

❷元禄時代の寺子屋のようす
『男重宝記』1702年　桜井市兵衛家文書　福井県文書館蔵

この『男重宝記』は、日常生活に必要な諸知識・心得などを分類し、項目ごとにわかりやすく解説した読み物です。この「学文」の巻には、一般に都市部で寺子屋が増えはじめる元禄の頃のようすが描かれています。手習いとともに謡（うたい）、漢詩、和歌、連歌・俳諧が取り上げられていました。中央の「手ならひ仕やう（手習い仕様）」からは、折り本に手本を書く師匠（左）、個別に手本をみながら練習帳（草紙）に文字を書く子どものようすがわかります。縁側に干した草紙も描かれています。

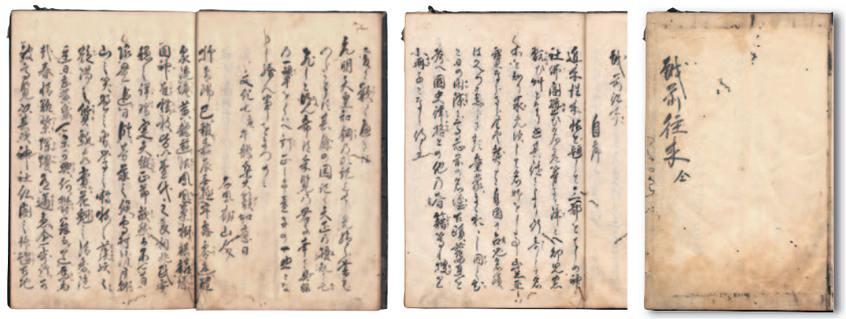
❶『庭訓往来』
吉川充雄家文書　福井県文書館蔵

『庭訓往来（ていきんおうらい）』は、14世紀の中ごろから後半にかけて編まれた早い時代の教科書です。武士の子弟を対象につくられたものと考えられており、一乗谷からも断片が出土しています。12か月の往復の手紙に8月の1通を加えた25通からなり、多様な単語と文例が学べるよう工夫されています。このうち4月11日の手紙では、若狭の名産として「椎」が挙げられています。表紙の「御家流」は、江戸時代に幕府の公文書で用いられた書法で、庶民にも広く学ばれました。

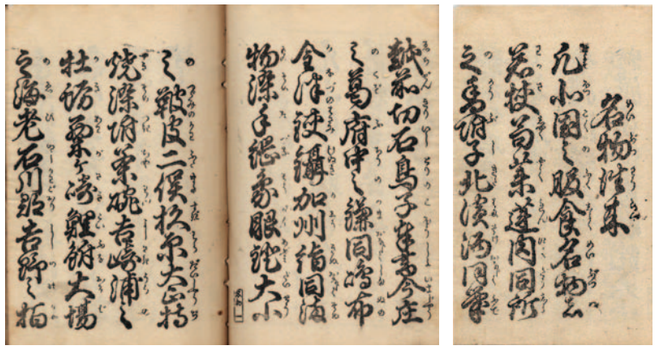
❸手習いの手本『商売往来』
桜井市兵衛家文書　福井県文書館蔵

❹『商売往来絵字引』
勝見宗左衛門家文書　福井県文書館蔵

元禄期から刊行されはじめた『商売往来』は、江戸時代にもっとも広く流布した往来物といわれています。商取引上の用語や貨幣名、庶民の日常の衣食住にかかわる豊富な商品名、商人生活上の心得から構成されています。この絵字引は、商品や語句に絵、読み、解説が付けられています。



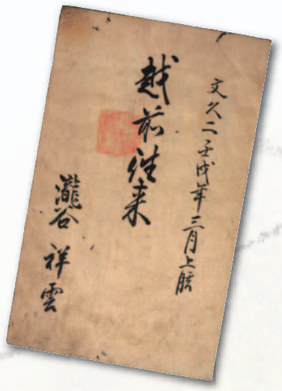
❺『越前往来』
1810年　福井大学附属図書館蔵



❻「名物往来」『合書往来』
1886年　福井県文書館蔵

「凡、北国之服食名物者（は）、若狭芍薬・蓮肉・同所之香附子（こうぶし）・北浜酒・同筆、越前切石・鳥子・奉書、今庄之葛、府中之鎌・同嶋布、金津鋏・鍋(けぬき)」と若狭・越前からはじまって加賀、越中、越後、佐渡の各国の産物が列挙されています。写真のものは明治に入って刊行されたものです。

❽『福井町尽』往来物倶楽部（小泉吉永）蔵



❼『越前往来』
1862年　福井市立郷土歴史博物館蔵

ふくいの往来物

19世紀に入って寺子屋が全国的に増えてくると、安定した需要が見込める往来物は、三都（江戸・大阪・京都）の書店で多数刊行されるようになります。地方にもこれらを売りさばく書店が現れ、またみずから版を起こす者も出てきました。

福井県内で出版された往来物では、福井西米町東角の会津屋清右衛門による『福井町尽』❽が知られています。「赤坂・七軒町・木田春日町・新町・辻町・鍛冶町」と福井城下の町人町を南から列記し、九十九橋の北では右回りに城をまわるように町名が挙げられており、「大名小路」などの武家地も含まれていました。

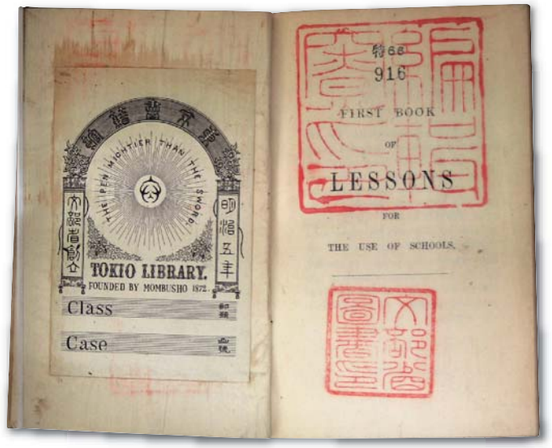
さらに、出版こそされませんでしたが、越前国内の名所や産物を取り上げた往来物が著わされていました。1810年（文化7）に書かれた『越前往来』❺は、敦賀郡からはじまり、郡ごとに各地の主要な社寺や城跡・旧跡を紹介しています。訓点と一部に読みはついていますが、難解な語句の多い漢文体で書かれていました。その「自序」では、近年「往来帖」と題して三都を中心に神社・仏閣や名産を収載して子どもまでが楽しんでいるが、自国の古地や名蹟を知らない者が多いと、執筆のきっかけを述べています。都市部の旺盛な往来物の刊行が、みずからの地域の歴史や地誌を子どもたちに伝えようとする契機になっているのは興味深いことです。

この50年ほど後に記された同名の『越前往来』❼（1862年）は、越前の町や村の150を超える多彩な産物が書き上げられ、はるかに平易で親しみやすいものになっています。

すでに金沢で安政年間（1854～60年）の少し前ごろから刊行された『合書往来』のなかに北陸各国の産物を取り上げた「名物往来」❻が収載されていました。前半に産物を列記し、後半に諸国・外国との交易や国内の経済的な繁栄、名所・名刹に触れる構成は、『加賀往来』（1854年）などと似ていることから（『往来物解題辞典』）、これら既刊の書物を参照していた可能性も十分考えられますが、日本海海運による蝦夷松前からの珍品や秋田米の入津、さらにはアメリカなど外国との交易まで触れている点は、開国後の時代感覚を映したものとみることができます。

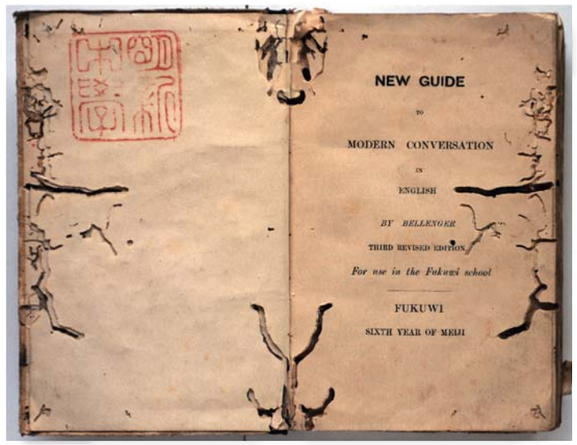
取り上げられている産品は、量的な広がりがわかるものではありませんが、福井の絹・紬、丸岡の木綿車（木綿繰り糸か）・同鬢附（びんづけ）（油）、府中の布・綿・色紙・鳥子（紙）・干しうどん・鎌・竹皮笠、大滝の奉書紙、金津のくぎぬき、松岡の鍋釜、織田の瓶、東郷の米穀、味見の蕎麦、尺谷（笏谷）の切石、勝山の煙草などが語呂よく並べられています。

これ以外の往来物では、さらに同名の異本で、敦賀の気比神宮から越知山（おちさん）、福井城下、三国、吉崎、永平寺、平泉寺、白山と名所をまわる趣向の手紙文の『越前往来』、大野藩の年頭儀礼や海岸部の大野藩領の村むらを含めた産物をうたった『大野往来』などが知られています。



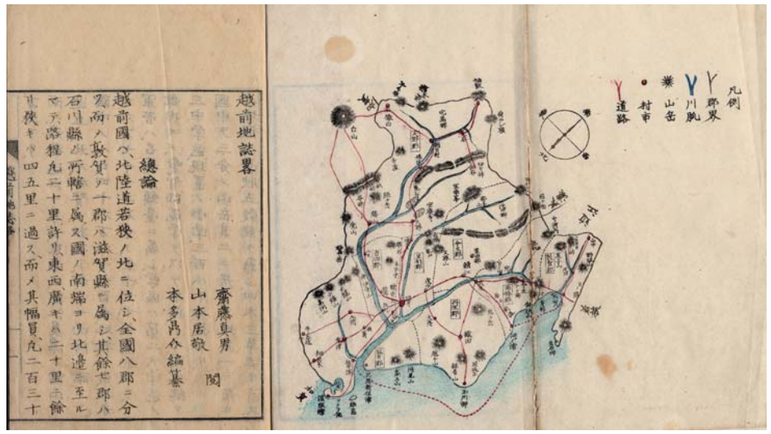
❾『ホルストブック』
1872年　国立国会図書館蔵

『ホルストブック』は、国立公文書館蔵のものとあわせて2点が確認されています。扉には「FIRST BOOK OF LESSONS FOR THE USE OF SCHOOLS」とあり、「ホルスト」とは「ファースト」のこととわかります。



❿『NEW GUIDE TO MODERN CONVERSATION IN ENGLISH』
1873年　福井市立図書館蔵

左上に藩校の流れをくむ明新中学（藤島高校の前身）の印があり、11冊残存しているなかの1冊です。



⓫『越前国地誌略』
1876年　福井県立歴史博物館蔵

⓬ 県内で出版された教科書
福井県文書館蔵

明治のはじめの教科書

1872年（明治5）の学制によって、近代的な教育制度が始まります。この時期から86年の小学校令によって教科書検定制度が施行されるまでは、ある程度自由に各地域で教科書が発行され使用されていました。最も多く発行されたのは、各地域で印刷された『小学読本』『地理初歩』などの教科書でした。これらは、文部省と東京師範学校を中心に編集されたものでした。さらに、従来の往来物の流れをくむものや地域の歴史や地誌など、執筆・編集自体も県内で行われた教科書も少なくありませんでした。

このうち、『ホルストブック』❾は足羽県活版局が、学制公布直前の72年4月に文部省の出版許可をうけて刊行したものです。これは英語の入門書で、英国ダブリン（現在アイルランドのダブリン）で出版されたものをもとに活版で印刷されました。当時、同活版局が出版していた『撮要新聞』の記事から小学校の開校にあたって、英語教科書が不足していた「大野小学校」がこの本を求めたことがわかります（古谷尚子「明治初期越前大野における初等教育」）。

また『NEW GUIDE』❿は、翌年に出版された会話の語句を中心とした教科書です。表紙に「For use in the Fukuwi school（福井の学校で使うために）」とあります。

福井に招かれた外国人教師グリフィスの71年9月の日記には「活字の箱を開けた」「印刷機など（アメリカ）の商品が届いた」などの記述があり、『ホルストブック』と『NEW GUIDE』は、グリフィスが日本に持ち込んだ活字をもとに印刷された可能性があります。

『越前国地誌略』⓫は、76年に県の学務課長であった本多鼎介によって著された木版の地理教科書です。「総論」「山脈」「川脈」「海岸」のほか越前の各郡ごとの歴史を含めた構成になっており、男大迹（おおど）皇子（継体天皇）や朝倉氏、永平寺や丸岡城など著名な人物や名所旧跡が取り上げられています。その他、県内の教科書として、『単語篇』（1873年）、『越前国村尽』（1880年）、『書取必携』（1882年）⓬などがあります。

⓭『啓蒙知恵の環』
1872年　福井市立図書館蔵

福井藩出身の英学者の瓜生寅（於菟子）によって著された近代科学知識の紹介書です。社会におけるさまざまな事がらが記載されており、文部省の「小学教則」に読方の教科書として取り上げられています。

寺子屋師匠の記録

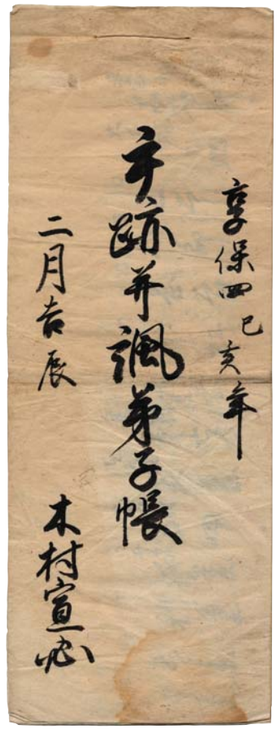
丹生郡家久村（越前市）の木村家は「先祖書」によると4代目善通以下7代目までの当主が寺子屋教育に携わったことが知られ、同村本承寺境内にはそれぞれ4人の師匠の筆塚⑮も残っています。

4代の善通（儀右衛門）は貞享の半知*以後、福井藩士に30年余仕えたのち、村に帰り近隣の子どもたちに手習いを教えました。師匠として教えること20年余、1743年（寛保3）に81歳で亡くなりました。5代周房は本保代官所の書役手代を勤め、36年（元文元）役所の廃止を契機に村に帰り、寺子屋師匠を勤めること30余年、67年（明和4）64歳で亡くなりました。

1719年（享保4）の門人帳⑭は、4代善通の時のものです。これには、謡を含む合計114人が載っています。門人は枝村も含めて27か村に及んでいました。人数的には家久村が最も多く18人で、同村枝村の柳原、芝原村、本保村、瓜生村と続き、この段階では比較的近辺の村からの通学者が多いことがわかります（⑰図参照）。

さらに年代はわかりませんが、18世紀中頃のものと思われる門人帳が1冊残されています。「惣〆三百拾六人」とありますが、表紙と約2枚分の紙面が欠落しているため実際は288人が列記されています。人名の上に村名が記されており枝村も合わせるとその範囲は47か村に及んでいました。通学圏は1719年より広域化しており、白崎村、八田新保村など通学距離が10キロメートルをこえる村もあり、寄宿していた門人もいたものと思われます。地域的に門人が多いのは瓜生村と本保村で、家久村の枝村の柳原、次いで家久村がこれに続いていました。

*1686年（貞享3）に、福井藩の所領が半減された事件で、「貞享の大法」とも呼ばれています。



⑭「手跡并諷弟子帳」
木村孫右衛門家文書

「手跡」は手習い、「諷」は謡のことをさすと考えられます。

⑮ 木村家の筆塚
越前市　本承寺

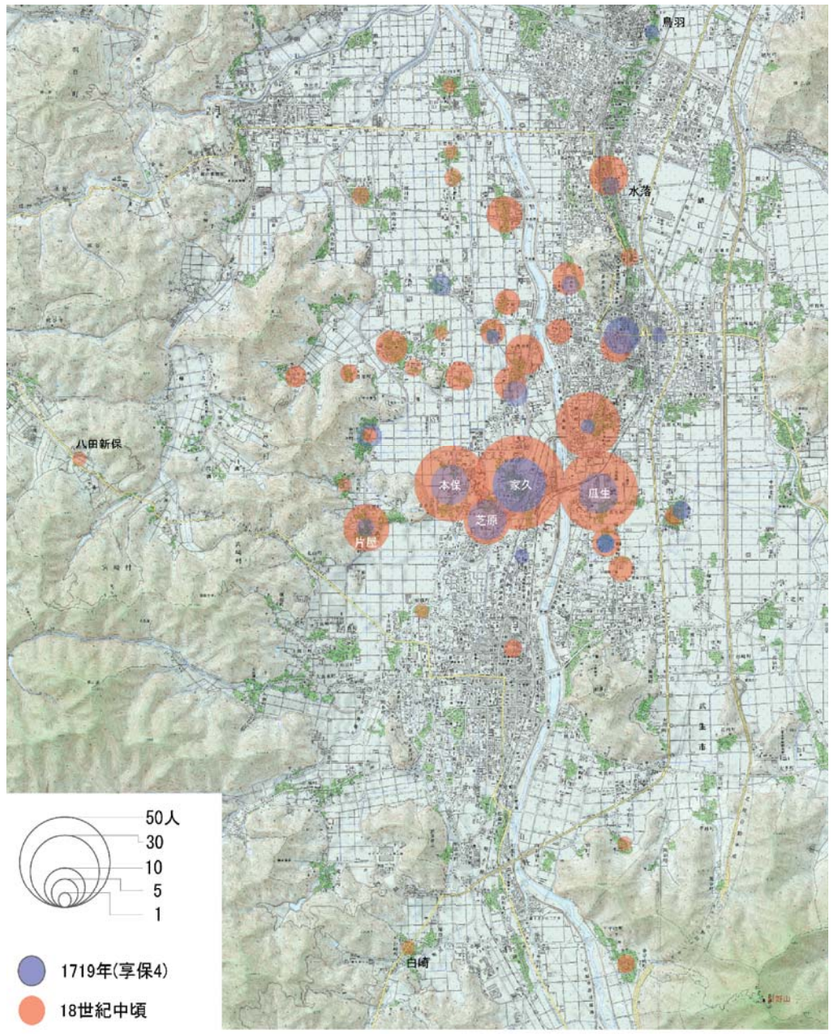
師匠の学恩に報いるために門人たちが残したもので、4基並んでいます。

⑯ 手本の控
木村孫右衛門家文書

6代周紹から8代周応が、1785年（天明5）から1862年（文久2）までの80年間に子どもたちに書いた手本文の覚が、4冊残されています。この間、門人の数は500人をこえ、天保期ごろから女子が少し増えはじめ、1割を占めた時期もありました。

学習内容は、当初、長く学んだ場合でも、いろは、実生活に即した手紙の例文、源平（名頭）などでしたが、文化期から商売往来を学ぶケースが増えていました。

見開きページは、16年（文化13）のものですが、上本保村助八の娘「おきん」は、手紙の例文、家久村の「久吉」と「直治郎」は商売往来、同村枝村の井部の「房松」は、いろは、手紙の例文を習っていました。



⑰ 図　門人の居村分布　このほかに、福井、清水畑村、坂下村（1名ずつ）がある。また、柳原は家久村に含めた。

手習い手本
－子どもたちの学習記録－

江戸時代に子どもたちが使っていた教科書は、師匠がひとりひとりの家業や進路にあわせて1枚ずつ書いてくれた手本でした。

若狭町食見（しきみ）の桜井市兵衛家に残されていた手習い手本20冊は、1795年（寛政7）から小学校が開校した1874年（明治7）までの約80年間にわたり、少なくとも7人の子どもたちが使用したことがわかるものです。

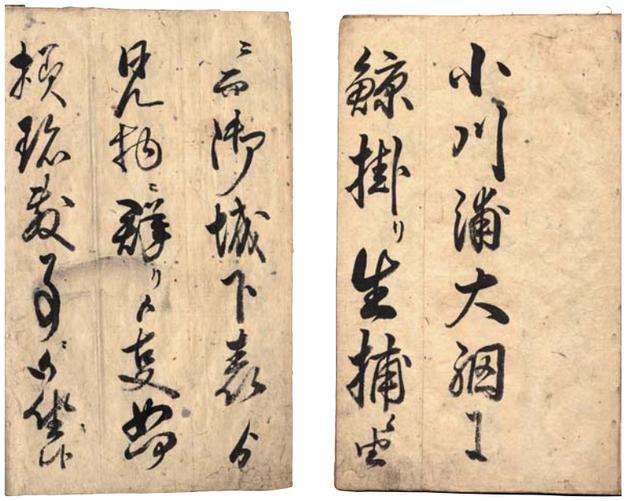
もっとも古いのは政吉の手本5冊で、1795年から約5年間にわたっていました。ただしこの中には「いろは」や数字など初期段階が含まれていないので、実際の就学期間はもう少し長かったと考えられます。98年の「御手本」には、和漢朗詠集の漢詩や時候のあいさつ文とともに、近隣の小川浦で鯨が生け捕りされたエピソード⑳や小浜の祇園（ぎおんえ）会へのお誘い文が取り上げられ、子どもたちの興味をひく内容になっています。そのあとで「佐田村、大田村、山上、坂尻、佐柿」に始まる三方郡の村名、ついで遠敷郡の村名を学んでいました。

⑱ **桜井家の手習い手本**
桜井市兵衛家文書　福井県文書館蔵

⑲ **手本の端書き**
「御手本」1829年　桜井市兵衛家文書　福井県文書館蔵

前回までに終わった部分（「いろは」の「えてあ迄」）と子どもの名前「鼠屋市之助殿」が書いてあり、次の手本を書くための覚と思われます（右）。時には、落書きがみつかることも。ここでは、ちょっと拙い俳句が書いてありました（左）。

山寺の日ぐらしきいて門しめるかな



⑳ **小川浦で鯨が生け捕りされたことを取り上げた手本**
「御手本」1798年　桜井市兵衛家文書　福井県文書館蔵

用紙には折り跡が残っています。当初4行あるいは6行に折って手本として使い、その後1冊にまとめたと推測されます。

小川浦大網に鯨掛り生捕候由ニ而、御城下表より見物ニ群り候事、如何様珍敷事ニ御座候

㉑ **家号之事**
「御手本」1830年　桜井市兵衛家文書　福井県文書館蔵

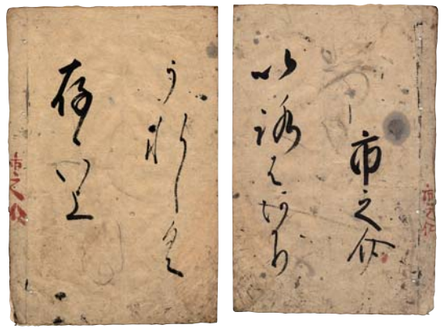
江戸時代の小浜の豪商であった組屋氏をはじめとして、町年寄も務めた主要な商人名や屋号が列挙されています。

30年後、1829年（文政12）の市之助の手本㉒には、入門段階の「いろは」が含まれていました。「いろは」の後では「名頭之事」「四季」「方角」「十二支」「親戚字尽」「相場之事」などを習っていました。手本の用紙端の日付から、この手本は27年（文政10）11月1日から始められ、修了するまでに1年11か月の期間がかかっていました。他の手本とあわせると、市之助の就学期間は7年半の長期にわたっていました。

さらに「組屋、桑村、窪田、長井」などの小浜の商人名から始まる「屋号之事」㉑を習ったことや、市之助が大鳥姓や鼠屋（桜井家の屋号は紙屋）を名乗ったことから、幼少時には小浜城下やその近隣に居住し、その地域の寺子屋で学んでいた可能性もあります。

また、子どもたちの共通の教材として5冊の『商売往来』がふくまれていました。『商売往来』は、商取引上の用語や豊富な商品名から構成され、江戸時代にもっとも広く普及した往来物です。海辺にありながら漁業権を持たなかった食見の人々が、早くから塩や油桐を生産し、それらの売買にかかわっていたことから選ばれたものと思われます。

身近な古文書の中に少なからずみかける手習い手本。このように少し丁寧にみてみると、地域の子どもたちの様ざまな学びのようすが具体的にわかってきます。



㉒ **「いろは」の手本**
「御手本」1829年　桜井市兵衛家文書　福井県文書館蔵

「いろは」の次に数字、そして「千万億斗升合勺才」を習った後で「市之介、いろはあかり、うれしく存候、い上」と喜びの言葉も手本になっています。